

社会教育委員ニューズレター 第18号

発行 佐賀県社会教育委員連絡協議会
事務局 佐賀県民環境部まなび課内

県社教委連第3回理事会

11月17日、3回目の理事会を佐賀市青少年センターで開催しました。

協議事項として、令和5年度佐賀県社会教育委員実践研修会(案)について協議が行われました。神埼市の千代田文化会館において、「学校部活や地域でスポーツを継続的に楽しむために」をテーマとしたトークセッションをすることについて承認されました。

また、報告事項として、社会教育研究大会の第65回全国大会・第53回九州大会宮崎大会、第66回全国大会茨城大会及び令和6年度九州大会鹿児島大会、令和5年度全国社教連表彰の被表彰者の決定について報告がありました。

九社連運営委員会・理事会

11月9日、宮崎市で開催されました。

運営委員会の議案として令和4年度大分大会の収支決算報告、令和5年度宮崎大会の収支予算案及び同大会の運営並びに令和6年度鹿児島大会の開催について協議され、原案どおり承認されました。理事会の議案として令和6年度の役員案と社会教育委員の九州大会及び全国大会の開催順が提案され、承認されました。

全国社会教育委員連合総会

第2回(令和5年11月開催)

○第1号議案 第66回全国社会教育研究大会(茨城大会)について

開催方法等を今後検討し、次総会に提案することで承認されました。

○第2号議案 第67回全国社会

教育研究大会(岩手大会)について

開催要項素案が承認されました。

○第3号議案 第68回全国社会教育研究大会の開催地区について

近畿ブロックで開催することが承認されました。

○第4号議案 理事の退任及び選任について

理事の退任(2名)、それに伴う選任が承認されました

第65回全国大会宮崎大会

シンポジウムのテーマは、「誰もが生きがいを感じられる地域社会の実現」社会教育の学びを生かし、人と人をつなぐ」で、社会教育のそれぞれの取組が、点ではなく、線でつながるためにはどうすればよいか、さらにこれまでに社会教育に関心がなかった方々にも活動に参加していただくためには何が必要かを参加者とともに考えていきました。

シンポジストには、文部科学省CSマイスターの西祐樹さんなどに加え、佐賀県から、よりみちステーション代表の小林由枝さんも

登壇されました。よりみちステーション(武雄)は、平成24年より、子ども達の放課後の居場所づくりや子どもや若者が安心して集える場としての活動を行い、内閣府の大臣表彰も受けています。

子どもたちが、窮屈な放課後(さんま(空間、時間、仲間)がない状態)を過ごしていることから、いつでも誰でも来られる、みんなの居場所(ぼちぼちや、てくてく、くむくむ)を開設されました。

そこでの子ども達の活動(やりたいことを、やりたいようにし、何をしてもいいし、何もしなくてもいい)や運営状況(場所は子どもたちの生活圏内の公民館、まちなかの空き家で、いろんな世代の人が集い、できる人ができることをできるときにしていること)、大切にしていくこと(子どもを評価せずありのままを受け止め、子どもたちの話を傾けて地域の大人としてできることを行っていること)などについて説明されました。

分科会は、5つあり、学校・地域の連携・協働などのテーマに沿って全国のすばらしい事例が発表され、熱心な質疑等が行われました。

た。



県社教委連実践研修会

1月30日、令和5年度の実践研修会を神埼市の千代田文化会館において開催しました。

上野会長のあいさつの後、「学校部活動や地域でスポーツを継続

的に楽しむために」をテーマにトークセッションを行いました。

コーディネーターに上野会長、パネリストに県保健体育課の島SAGA部活推進総括推進監、赤松スポーツクラブ・シャチの須藤クラブマネージャ、県SAGA2024・SSP推進局の日野SSP総括監をお迎えして、約1時間半にわたってトークセッションを行っていただきました。

その後、会場からの質問等も含めて意見交換を行いました。その概要は、次のとおりです。

上野会長あいさつ

上野会長から研修会の冒頭に次のとおり挨拶がありました。

昨年は、社会教育施設の有効活用というテーマでポートレースからつ（コミュニティエリアを設置しリニユール）で実施したが、今年は、「学校部活や地域でスポーツを継続的に楽しむために」というテーマで100名を超える方々に参加いただいている。

2024国スポや全障スポ、部活動の地域移行に関心を持って

る人が多いと思う。

また、SSP（SAGAスポーツピラミッド）については、詳しく知らない人もいるのではないかと子ども達は、地域で部活動等をどのように活動して、社会教育委員は子ども達を支えるためにどういったことに配慮しながら活動していくのか。

本日は、それぞれの分野で佐賀県をリードする3名の方に来ていただいている。

コロナ禍を経て、地域活動が戻ってきている中で、国スポ等を契機にして、どのようにスポーツを広げていけるのか。生涯にわたって健康的でウェルビーイングに過ごすためにはどうしたらいいのかを考えていく。



トークセッション

テーマ 学校部活動や地域でスポーツを継続的に楽しむために

最初に上野会長から、研修会のテーマの趣旨や進め方などについて説明がありました。

パネリストの島一満さんから「SAGA部活の推進」について部活動の地域連携や移行などを紹介されました。

須藤義仁さんからは、地域総合型スポーツクラブである赤松スポーツクラブ・シャチの活動について紹介されました。

日野稔邦さんからは、世界標準のスポーツ文化を実現するためのSSP構想について紹介されました。

それぞれの発言の要旨については、次のとおりです。

(島) 本日のポイントは2つ。まず、SAGA部活について知って

いただきたいと思います。また、社会教育委員の方にも、地域で、中学生の文化活動やスポーツに関わり、応援をしていただきたい。

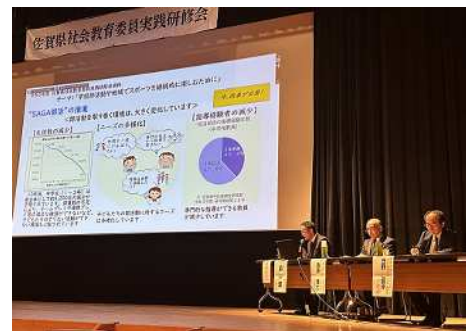
部活がどう進んでいくのか、ど

う変わっていくのかを説明する。

「学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドライン」では、令和5年度から令和7年度までを部活改革の推進期間と定め、地域連携や移行に取り組み、まずは、休日における地域でのスポーツ等の活動環境の整備を着実に推進するとなっている。

これらを受け、佐賀県では、令和3年に「SAGA部活未来プロジェクト委員会」を立ち上げ議論を重ね、令和4年3月には11のモデルの提案書を作成し、関係機関に発出した。

令和5年にはSAGA部活コーディネーターを配置し、チームSAGA部活を立ち上げ、関係機関との連携や各市町の実情に応じた部活改革の推進を図っている。今後は、保護者や地域の方とも連携して指導者の確保などの課題に取り組み、地域移行を進めていきたい。



（須藤）地域総合型スポーツとは、

人々が身近な地域（自転車で行ける範囲）でスポーツに親しめるようにしたもの。これまでの単一型目のスポーツクラブと比べ、さまざまなスポーツを愛好できる多目的、子どもから高齢者まで参加できる多世代、初心者から上級者までが楽しめる多志向が特色で、より広がりがある。また、クラブマネジャー等のリーダーシップのもと地域住民により自主的・主体的に運営されている非営利のクラブのことである。

佐賀県には現在、地域総合型スポーツクラブが27あり、13クラブが県の協議会に登録され、準登録が8クラブ、未登録が6クラブ

ある。

赤松スポーツクラブ・シヤチ（小学校の門の上の「鯨」が名称の由来）は、地域の高齢化の進展やマシンの増加による地域活動の希薄化等を背景として、スポーツを通じた地域のコミュニケーションづくり、誰もが気軽にいつまでも楽しめる活動で健康づくり、地域コミュニティと連携した地域の活性化を図ることを理念に、校区

の体育協会を母体として平成20年3月に設立された。県内初のコミュニティスクールに指定された赤松小学校の安全部会に所属しており、オレンジのクラブジャンパー等を着て交通立ち番や挨拶、清掃活動なども行い、クラブの認知度の向上や地域住民との信頼関係を構築してきた。今後、SAGA2024国スポ等を契機として、地元でのスポーツ活動への喚起などを図っていきたい。

（日野）SSPとは、SAGA2024国スポだけのためではなく、世界に挑戦するアスリートの育成を通じたスポーツ文化（する、育てる、観る、支える、稼ぐ）の拡大、スポーツの力を活かした人づ

くり、地域づくりなどを目的とした世界に誇れる独自の構想のこと。たとえば、佐賀商業や佐賀北高校が高校野球で優勝したときは、地元は、大変盛り上がった。身近な選手が全国大会等で活躍すると地元が注目するが、これは地方の特色で東京などの都会にはそのような傾向はなく、県民に夢、感動、誇りを与える。

また、活躍したアスリートが指導者やスポーツに関連することで佐賀に帰ってくる流れを作る。

このため、人材育成(SSP基金の設置等)、練習環境の充実(アスリート寮、女性アスリートウェルネス協議会の設置等)、就職支援(アスリート・指導者の採用支援等)を行っている。

スポーツ「ビジネス」は世界ではスタンダードであり、SAGAアリーナや佐賀バルナーズなどのプロチームの活用など、スポーツとビジネスを融合させ「稼ぐ」という視点をもつことも大事。

社会教育委員の皆様におかれても、今後ともそれぞれのお立場でご活躍いただきたい。

（文責 事務局）



アンケートについて

紙やスマホ等から50名(回答率約53%)の方に回答いただきました。

参加動機では、自身の見識等を広げ職務に活かしたかった(約49%)が一番多く、次いでトークセッションのテーマに関心があった(約32%)となっていました。トークセッションは、各地域での取組やSSP構想など新しい情報を得ることができ、興味がわき今後の活動に活かしていきたいとの回答をいただきました。(活動等の参考になった90%)

参加者の方が、目的意識や関心を持って研修に取り組んでおられることをアンケートから読みとることができました。

実践研修会後に記入していただいたアンケートの一部を御紹介します。(構成上、若干字句を変更しています。)

〇トークセッション

(SAGA部活)

- ・部活動の在り方などは、とても重要な題材であり、これからの委員会での話し合いに必要な内容だった。
- ・部活の地域移行は時間がかかると思う。地域で支えることの大切さを考えていかねばと思う。
- ・中学生などの子どもがいる親としては、とても興味深い話で、今後の展望が気になっていた。すべてに共通することは、「地域の子どもは、地域で育てる」ということ。
- ・部活動の地域移行の検討が立ち上がると思っているので、その際の参考になればと思う。
- ・市町単位で、競技志向と楽しみ

や交流を主にした活動体制を作るのは困難で、どうすればいいのかと思った。

(地域総合スポーツクラブ)

- ・生涯スポーツの下地を作ることの大切さを実感した。
- ・スポーツへの取組は個人差があるので、スポーツを中心として地域コミュニティの活性化を図ることは難しいと思っていたが、発表事例の取組は、新たな発見があった。

- ・地域総合型スポーツの活動もしているが、新たな視点からスポーツをテーマにした、まちづくりを考えるきっかけとなった。
- ・スポーツも地域活性化の一つの切り口であることが理解でき、自分の業務内でできることを考えた。

(SSP構想)

- ・「稼ぐ」ことも考える発想は参考になった。「佐賀から世界に挑戦するアスリート」や「SSP女性アスリートウエルネス」も素晴らしい取組だと思った。
- ・地域で育った子どもが大きく羽ばたく姿に応援したくなった。
- ・地域の方がバリアフリーに楽し

く参加、交流できるプログラムの作成に参考になった。

・いろいろなアイテムや人材を活用して、地域から世界レベルの活躍ができるようになることを学ぶことができた。

・トップアスリート育成の基盤として地域活性化は重要であると思う。

〇今後の活動

- ・スポーツによる地域での人づくりに頑張りたい。既存の発想にとらわれずに前進したい。
- ・幼稚園や小学校での遊びからスポーツへの興味を育てていければと思う。
- ・研修の内容を踏まえて、自分の地域の現状と比較したい。
- ・教育委員会の話し合いで部活の今後に悩んでいたが、研修内容を次回の委員会で伝えたい。
- ・一見すると社会教育とは関係がないと思われるものでも、地域コミュニティに組み込むことができると分かった。様々な角度から物事を見るようにし、だれでも参加でき、地域全体でまちづくりができる環境ができるようにしたい。
- ・新たな学びや最新のことがわか

り、学んだことを地域で活かしていきたい。
 ・部活動の地域移行に積極的に関わっていきたい。

○その他

・孫が社会体育のバレーなどを楽しんでおり、スポーツの素晴らしさや頑張っている関係者の方に感謝している。

・スポーツ振興は行政主導が現状なので市町の考えを聞きたい。

・不登校や引きこもり（大人を含む）等に社会教育としてどう向き合うかに関する研修を希望。

・社会教育士や社会教育主事などの社会教育行政での具体的な活用事例を聞きたい。

「子ども会活動と社会教育」

佐賀市 社会教育委員

石丸 正信

初めに、子ども会について説明いたします。子ども会は、乳幼児から高校3年生年齢（一八歳）相当までを構成員とし、地域を基盤とした異年齢の集団（コミュニティ）です。これを単位子ども会と称し、指導者・育成者を含めた総

称としています。その活動は子どもたち自ら計画し実行する自主的な活動が基本になります。それら

の単位子ども会を校区ごとにまとめて校区子ども会があり、校区を

まとめたものが佐賀市子ども会連絡協議会、そして各市町の子ど

も会をまとめて佐賀県子ども会連合会、さらに全国を7つのブロック

に分けています。佐賀県は九州地区子ども会育成連絡協議会に所属

し、全国をまとめているのが全国子ども会連合会になります。それ

ぞれの組織は独立してそれぞれ独自の事業を展開しています。

私はそれらすべての組織に所属して、すべてのレベルの事業

に携わっています。そのなかで力を入れていている県内事業のいくつか

を紹介したいと思います。

一つがジュニアリーダー（中学生）の育成と研修です。子ども会

だけではなく、地域のリーダーとして活躍できることを期待して市

子連ジュニアリーダー研修会を一泊二日、県子連ジュニアリーダー

研修会を二泊三日の日程で毎年実施して、その中から選抜して九州地区ジュニアリーダー研修会

に派遣しています。

研修会は、九州各県が持ち回りで開催し、基本的には開催県のジュニアリーダーの子どもたちが企画運営をします。指導者・育成者

はサポートに回ります。研修内容は、コミュニケーション能力の向上、KYT（危険予知トレーニング）、アイスブレイクなどのレクレー

ション活動の進め方の実習など多岐にわたりますが、子どもたちは楽しく活動しています。

二つ目が安全啓発活動で、子どもたちにはキャンプなど行事が始まる前にKYT講習会を実施して、

重大事故や災害から自らの身を守るための訓練をします。死亡に至る事故、後遺症が残る事故を想定

し、自ら身を守るための想像力を高めてもらい、どうしたら守れるかをグループ討議で共有します。

大人の指導者・育成者向けには、安全啓発初級指導者養成講習会を開いています。内容は、安全に対する考え方や子どもたちの特性など、

産業界の安全対策からヒヤリハット、ヒューマンエラー、指差呼称などを学びスポーツでの事故防止

ケガをした際の対応、熱中症の予

防と対策、災害予防と対策など幅広い知識と対応のやり方を学び、

子どもたちに教えるKYT講習のやり方も学びます。受講者が自分の地域で伝えやすいように、

皆さんの資料も配布しています。子ども会の講習会はアクティブラーニング方式で、受講者自らが学ぶ方式で行います。これは子ども、

大人でも同じ方式です。三つ目は、県子連スポーツ大会（ドッチビー大会）レクレーションスポーツです。各市町の中で予選会を開き、夏休み後半に県大会を行って

います。チーム編成は男女混合でも良く、中学生の参加枠だけが定数が決められていて、小学生低学年から参加自由な大会で

す。昨年は唐津市を会場として開催され、県内の市町持ち回りで開催地が変わります。毎年白熱した

試合があり大変盛り上がりです。その他、市子連では榮の国祭りの子どもみこし募集と運営を担当

し、多くの校区から子どもみこしに参加します。また、校区自慢プロジェクトでは、子どもたちが自

分の校区の良いところ、見所やおいしい食べ物など、子どもの視点

から見たところ、見所やおいしい食べ物など、子どもの視点

から見たところ、見所やおいしい食べ物など、子どもの視点

から見たところ、見所やおいしい食べ物など、子どもの視点

から見たところ、見所やおいしい食べ物など、子どもの視点

から見たところ、見所やおいしい食べ物など、子どもの視点

から見たところ、見所やおいしい食べ物など、子どもの視点

から見たところ、見所やおいしい食べ物など、子どもの視点

から見たところ、見所やおいしい食べ物など、子どもの視点

から見たところ、見所やおいしい食べ物など、子どもの視点



研修会の様子

で見つけて模造紙に書き込み展示します。その展示最後の日に、交流会があり、展示の内容についてのプレゼンを、子どもたちが色んな趣向で発表してくれます。また、それぞれの校区や単位子ども会でも、地域の特性を生かして様々な体験活動を展開しています。

スマホ、タブレットなどネット環境が充実している現在、子どもたちはwebですぐに検索して分かった気になっているようですが、このような時にこそ直接体験活動が必要であり、様々な経験をかさね、時には失敗をしながら経験を積むことが、今まさに必要とされていると感じております。

「本の森を育てる」

伊万里市 社会教育委員

犬塚 まゆみ

昨今の世の中、生成AI（人工知能）が脚光をあび進化を続けている。ニュースの時間…「AIによる自動音声でお送りします」囲碁の時間…「AIの予想によると…」。コンピュータが人間の知的能力を学ぶことができるようになり、翻訳、自動車の自動運転などAIは大きな役割を果たしつつある。

しかし、この秋、佐賀大学理工学部で開催された、半導体メーカー大手であるSUMCOの副社長龍田次郎氏の講演で、学生の生き方について、学生時代に本を読むことを勧めておられた。「いい本はその世界に没入できるための疑似体験ができ、これに知識を重ね合わせることで教養が蓄積される。教養はAI時代を生きるのに必要な武器だと思う」（令和5年11月14日佐賀新聞）。AI時代の先端を行くであろう会社の副社長さんが読書の大切さを語っておられ

た。

また、ニグロは本を読まないといわれた時代、ニューヨークに書店を開いたルイス・ミシヨは「黒人は知識が本の中にあることを知らなければならぬ。そして、それを読む必要がある」（『ハーレムの闘う本屋』・あすなる書房）と説いた。

ともあれ、読書の大切さは古くから言われ続けているにも関わらず昨今は本を手にする人が少なくなりつつある。そんな中、期せずして令和5年度の佐賀県社会教育委員会総会でトークセッション

が行われた。テーマは「読書活動を通じた地域コミュニティ等との連携」であった。伊万里市民図書館の鴻上館長も登壇し「まちづくりを担う市民図書館」の取り組みをのべられたが、その図書館を守り育てる活動をしているのが《図書館フレンズいまり》であり、私も会員の一人である。現在、会員350人、年会費1000円、図書館を大事に思う人ならだれでも入会できる。旗印は「図書館への協力と提言」。

守り育てるために必要な資金は

古本市やグッズの販売などで稼いでいて、収益金を元に図書館で活動するボランティア団体へ助成金も出している。ボランティアグループには布の絵本やおもちゃを作成する「てんとう虫の家」、館内でお話会や保育園へ出向きお話を届ける「おはなしキャラバン」、図書館に美しい歌声を響かせる「いすの木合唱団」など。これらのグループの自主的活動が、図書館に豊かさをもたらし、読書への誘いも行っている。

フレンズの独自の活動はいくつもあるが、その中の一つ新図書館の起工式を記念しての《めばえの日》は、毎年、来館者に300食のぜんざいを振る舞い、図書館を持った原点を共に忘れないようにしようという催し。また図書館開館を祝う《ほしまつり》はその中心となって祭りを盛り上げている。他に、広く図書館のことを知ってもらおうようにと広報紙の発行や、花で心安らぐようにという美化活動、学習会や講演会の開催など多岐に渡っている。

図書館は本のヤカタであり民主主義のトリデである。伊万里市民

図書館の設置条例第一条では「すべての市民の知的自由を確保し、文化的かつ民主的な地方自治の発展を促すため生涯学習の拠点として…」と謳っている。多くの人が本や情報とふれあうことで、これから大きく変化していくだろう社会に対応し生きていく力になるように、私も仲間と共に日々活動を続けている。



市民図書館で開催する古本市

「社会教育って、楽しい！」

鹿島市 社会教育委員

稲葉 ゆう子

私が鹿島市から社会教育委員を拝命したのは平成15年。家業の水産加工業を継ぐ為に、家族全員で私の実家に戻ることに。六経った頃でした。鹿島市に戻ってすぐに、女性参画活動をされていた先輩に誘われ

て、ガタリンピックでゴミひろいや鹿島おどりに参加していました。その際、先輩方の一人から、その方が卒業されるということだったのでその後を引き継ぐことになった次第です。

あれから20年。家業の水産加工業をたたみ、私の活動は平成12年に始めた鹿島地方の方言で人情芝居を演じる「にわか一座」を結成したことで、芸能活動中心の生活に移行しています。また、3年前のコロナ禍から芸能活動も激減したため、障害者施設での食事世話の仕事を友人の紹介で始めました。そして、ほぼ同時期から、地元のJR肥前浜駅内に開設された日本酒バー「HAMABAR」での接客や、観光列車でのおもてなしにも参加しています。

私は生まれついてのお祭り人間で、ここ20年程は地元のお祭りでの奉納舞踊にも参加しており、16年ほど前から振付指導を担当するようになりました。その奉納舞踊団体が近隣のイベントなどから出演依頼がくるようになったため、奉納踊り子有志を募り、おどりの団体を立ち上げ、現在も精力的に活動が続いています。季節ごとに開催されるお酒にまつわるイベントにも、ほぼ毎回いろんな形

で参加しています。

気がつけば「あれ、いつから休んでなかったっけ？」というくらい忙しい日々を送っています。こんな生活ですから、社会教育委員の会議や研修会が皆勤賞というわけには行きません。何度も、お役に立ってないはずだから辞退した方がよいのではなにか…と葛藤しつつ、今に至っております。

そもそも、「社会教育委員ってどんなことをしなくてはならなかったかな？会議に出席して、研修会に出席して…それから？」と考えを巡らせていたら、自分が今まで活動してきたことの中でいくつか社会教育活動に当てはまるのではないかと思える項目に思い至りました。

例えば、20年来のライフワークとしている『保育園、小学校、中学校への読み語り活動』です。お店などで、突然保育園児から「いなばちゃん♡」と可愛い声がかかったり、イケメンの若者から「絵本の読み語り、楽しかったです！」と話しかけられたりすることがよくあります。子どもたちの記憶のどこかに、私たちが読ませてもらった数々の本のストーリーが楽しい思い出として残っているの

でしょう。今後、子どもたちが成長したときに、何かの活動のきっかけとなればと願っています。また、にわか一座の一環で啓発活動も行っています。認知症に対する理解や、新小1年生の為の交通安全指導、ニセ電話詐欺防止の意識啓発、ネット社会における子どもたちの犯罪防止などです。これらを楽しく、分かりやすく学んでもらうことで、子どもから高齢者までの暮らしがより良いものになってほしいと思っています。

地元のイベントを始めた当初は町内からの来場は少なく、町外からのお客様の方が多かったです。しかし、最近では道を歩けば2メートルおきにご挨拶をするくらい、町内の皆さんが来場され、楽しんでいらつしやいます。皆さん笑顔で誇らしげな表情です。また、お祭りから誕生したおどり団体のメンバーは、ほとんど地元の先輩たちです。おどったりイベントに参加したりする度に町に対する愛着が深まり、地元の皆さんとのつながりもぐっと深まってきました。そして、観光列車のおもてなしも、始めた当初はごくわずかな限られたメンバーでしたが、少しずつ仲間も増えてきています。これが社会教育

なのかな。今やっていることの全てが社会教育に関わっているような気がしてきました。何だかこの原稿を書いているうちにワクワクしてきて、勇気が湧いてきました。

さあ、次は何しようかな。そうだが、災害に見舞われた時に乗り越える体力、精神力、生き抜く知恵を身につける為の活動を始めてみようかな。社会教育って楽しいし、頼もしい！



賑い、ODORIKO ハマガール

「私の社会教育委員の活動について」

基山町 社会教育委員

真島 一英

【基山町の概要】

基山町は、佐賀県の東端に位置し、福岡県筑紫野市、小郡市に隣接しており、佐賀県の東の玄関口となっています。基山町の面積は、

22.15km²で約3分の2が丘陵で、人口は1万7千人と小さな町ではありますが、国の特別史跡「基肆城跡」や四季折々を楽しむことができる「大興善寺」など歴史と自然に恵まれた魅力的な町です。

また、古くから古代官道や長崎街道などの主要道があったところで、現在でも、町の東側にJR鹿児島本線、それに並行して国道3号線、さらにその東側には九州自動車道が走っています。まちの西側には鳥栖筑紫野道路、南端には大分自動車道が通り、町の20〜30km圏内には福岡市、佐賀市、久留米市などがある九州の大動脈の結節点として、通勤・通学に便利な地でもあります。

【社会教育委員としての活動内容】

私の社会教育委員の主な活動内容としては、年3回の定例会議、人権・同和教育などの研修会への参加、さらに基山町民会館運営審議委員も担っているため、年1回ほど、社会教育施設や体育施設の指定管理者制度が活かされ円滑な運営がされているか、利用者の方々が安心・安全に利用できてい

るのかの審議を行っています。

一方、私は基山町第17区の自治会長・区長の任務も拝命しており、住民の方々がお互い支え合いながら安全・安心で心豊かに暮らせることを願い活動しております。主な活動としては、小中学生の下校時間帯に見守りと美化活動を兼ねた防犯パトロールの実施、地域の自主防災会で、高齢者・要介護者への声掛け、「どんど焼き」などを

利用し、初期消火訓練、けやき台4区(第14区〜17区)合同での当該地区に特化した防災講習会の実施、地域内の高齢化や独居老人への支援等を行っています。様々な取り組みの中から、地域内の高齢化や独居老人への支援について詳しく紹介させていただきます。けやき台4区では、高齢化が進み、独居老人が増加しています。当該地区には、農水産物・食料品などを販売する店舗がなく、高齢者の方々が買い物に難儀する状況下にあります。この問題に対して支援していくために、けやき台4区自治会3役が主体となって、毎週日曜日に公園にてけやき台朝市を開催し、農水産物や食料品などの販

売を行っています。高齢者を含め幅広い年齢層の方々に来場いただくために、組合回覧での周知、年4回のイベント時においては、全世帯にチラシを配布しています。年に4回開催している「お客様感謝祭」には、米すくいやビンゴ大会、グラウンドゴルフ等も行い、多世代の地域住民の交流を図り、けやき台4区全体の活性化に繋がっています。

そのほかにも、今年は「けやき台4区合同夏祭り」を4年ぶりに開催し、地元で活動・活躍されている子どもたちの各種ダンス・太极拳の披露や音楽愛好会・ギター同好会による歌の披露をしていただきました。さらに、的屋の出店により、夏休みで里帰りしていた方も含め、約800名の方々にご来場いただき、思い出に残る楽しいひとときを過ごしていただきました。

【まとめ】

長年社会教育に携わり、学んだ経験や知識をこれからも活かしながら、ふれあいのある活気あふれる地域・街づくりを目指して日々活動していく所存です。



けやき台4区合同夏祭

編集後記

1月の実践研修会はいかがだったでしょうか。今回の研修のテーマは「スポーツ」でしたが、語源はラテン語の「deportare」といわれています。「運ぶ」いう意味から「気分転換」という意味が発生して、日々の生活から離れた遊びや楽しみ、休養をさす言葉になりました。

また、スポーツ庁もこの語源を踏まえて「人生を楽しく、健康的で生き生きとしたものにするために、誰もが自由に身体を動かし、自由に観戦し、楽しめるもの」としました。

第2期のスポーツ基本計画で

は、スポーツを「する」「みる」「ささえる」といった観点から、スポーツに関わる人口を増やす方向性が示されています。

小学校での運動会では、子どもや孫の姿を見に、おじいちゃんやおばあちゃんをはじめ多くの方が参加し、子どもが一生懸命に演技したり、走ったり、いつもとは違う面を発見したりする。お父さんは駐車場の案内や警備にボランティアで参加し、お昼には家族と一緒にお弁当を食べる。ここに、学校と家庭・地域の連携の原点があるような気がします。

学校で行う、部活動や運動会は、あくまでも「体育」（身体教育、physical education）ですが、この研修で学んだことや、「スポーツ」の3つの視点に加え、人々を「つなぐ」とか「居場所をつくる」といった社会教育的な観点からも考える活動をすることで、人々がいつでも、どこでも、いつまでもスポーツを地域で楽しめ、生き生きとした地域コミュニティの形成に繋がっていくと思います。

 佐賀県社会教育委員連絡協議会事務局(佐賀県県民環境部まなび課)
 〒840-8570 (住所不要)
 Tel 0952 (25) 7313
 Fax 0952 (25) 7406
 ✉ manabi@pref.saga.lg.jp
